令和　４年度　　園評価書

園番号　25　園名　**静岡市立東豊田こども園**

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
豊かに表現する子	認め合い育ち合う	自分の思いを伝えたり、自分なりの表現で表したりしながら遊びを楽しんでいる	・保育者が一人一人の良さを受け止めたり思いを共感したりすることで、安心感につながり、「自分」を表出しながら遊びに向かう姿が見られている。また、自分の思いを行動や表情、言葉で伝えながら好きな遊びを見つけ楽しんでいる。	A	A	・子ども達が学年枠を越えて、のびのび遊んでいる姿が良かった ・「失敗しても大丈夫」という温かな対応が非常に良い。子どもたちが安心して自分を出すことができ、何度でも挑戦しようとする姿につながっている	・「失敗しても大丈夫」という保育者の関わりや雰囲気を作りを継続し、思いのままに自分が表出できるよう支える ・安心感をもって生活や遊びに取り組めるよう、一人一人の思いや行動を肯定的に受け止めていくことを継続する ・日々の遊びの継続や広がり（展開）につながる遊びの終わり方やとっておき方等を子どもと共に考えていく ・子どもの興味関心を捉えた環境の再構成をしていく
		自分の良さを保育者や友達に認めてもらい、自信を持って生活したり遊んだりする	・一人一人の良さや友達の良さを、言葉に出して認めることを意識して関わることで、穏やかな表情となり安心して遊びに向かったり、自信をもって生活したりしている姿が見られている。また、友達同士で認め合う様子も見られつつある。	A	A		
		「もっとこうしてみよう」と考えたり試したりしながら、繰り返し遊びを楽しんでいる	・子どもの興味関心に沿った環境構成や意欲を引き出す言葉がけを繰り返し行ってきたことで、日々の遊びの広がりや発展が見られた。同じ遊びでもそれぞれの学年での試行錯誤が見られ、子どもの「おもしろい」「もっとこうしたい」が膨らんだ。	A	A		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	遊びの中での学びやこれまでの経験を踏まえた環境を用意することで子ども達の、活動や遊びが展開されている	・先行体験をふまえたりＰＤＣＡサイクルに基づいた週日案を活かしたりしながら環境構成に取り組んだ。子どもの興味や関心、夢中になるポイントを明確にし、子ども理解を深めることで、子ども一人一人に沿った環境が用意でき、遊びが発展する様子が見られた。	A	A	・今あるこの環境施設を使って質の高い保育を行い、子どものやってみたいという気持ちを上手に引き出しながら保育を行っている ・どの子も人懐っこく話しかけてくれ普段の教育の成果だと思う ・発達段階に応じた職員側の仕掛けが工夫されていて良い ・子ども一人一人の特徴や気持ちなどをよく捉え、適切な声掛けや対応ができている ・やればできる！という子どもたちへの思い、取り組みを小中学校につなげていきたい ・幼児教育へ注目が集まる中、先生方も大変だったのではないか。その中で「情報共有」をよく頑張っていたのではないか ・園児に対しても、園長、副園長、担任とどの先生に聞いても、園児の同じ姿が語られていた。職員間で共有できていると感じた ・幼児教育への理解を深めることで、小学校１年生への見方や指導の具体も変わってくる。幼児教育での学びや成長を基に、スタートカリキュラムの在り方を考えていきたいと思う ・年長児にとって小学校への期待と不安は本当に大きいと思うので、まずは小学校の施設利用等を通し、身近に感じてもらえたらと思う。 ・他の地域とは違い、TOHOでの活動が多いため子ども達も小学校や中学校への興味を小さいうちからもてる。 ・園同士の交流はとれているのか？そこもできていると良いのではないか ・新型コロナウイルスの関係でもあるだろうが、子ども同士が触れ合う機会が少なくなっている ・園外の活動ではより豊かな自然体験ができる。目的地へ行くまでの途中の自然を感じたり、実がなる物を見たり触れたり食べたりする等多くの自然体験をしてほしい ・危ないと避けるのではなく、身をもって体験することも大事である。体験することで、子ども自身に身についていくのではないか ・支援が必要な子が増えつつある中で、特別支援教育・保育では個性を尊重してく必要がある。保育者はその個の特性を理解して対応している ・写真やおたより、登降園時の担任からの話など、家庭への丁寧な情報発信がされている	・子どもの育ちや先行経験を把握すると共に興味関心を捉え、教材や環境を整え子どもと一緒に遊びを進める ・遊びが明日につながるように、遊びの終わり方やとっておき方を意識し、片付けに取り組む
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の育ちや生活リズムを考慮し、その子の気持ちに寄り添った援助を行っている	・保護者との会話から家庭の様子や子どもの育ち、体調等を把握することに努め、職員間での情報共有も行ってきた。職員が子ども一人一人に必要な援助を共有し、同じ対応ができるように取り組んだ。	A	A		・子どもに関する情報を職員で共有し、必要な援助についても同じ対応ができるよう、会議や打ち合わせで確認することを継続する
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子ども達一人一人の興味関心に合わせた素材や教材が提供できるように職員が教材研究を行っている	・子どもの遊びの姿を見取り、発達段階を考慮したり職員間でアイデアを出し合ったりして、教材提供ができている。しかし職員自身の教材そのものへの知識や技能が不足している場面もあった。教材研究を十分に行う必要性を感じている。	B	A		・遊びに関する教材研究を、研修計画に位置付けて取り組み、子どもの発達や興味関心に沿った教材を提供していく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	『ヒヤリハット』や『ヒヤッぷ』の共有や安全点検を通して、子ども達が安心、安全な園生活を送ることができている	・打ち合わせを利用してヒヤリハットの共有をすることで、職員同士が気づきを声に出したり掛け合ったりするなど、安全管理に関する意識が高まっている。今後ヒヤッぷを利用しての安全チェックを、徹底していきたい。	B	B		・園内の危険箇所が記してある「ヒヤッぷ」を利用した安全確認や対策等を毎月行い、全職員で周知し、けがや事故防止につなげる
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	基本的生活習慣や健康に過ごすことの大切さを知り、自分からやろうとする関わりや活動を考え行っている	・コロナ感染拡大予防への意識が定着し、健康に過ごすために必要なことを絵や写真を用いて指導してきたことで、手洗いうがいなどの基本的生活習慣が身に付いてきている。食育に関しても、栽培を通して育てて食べることの嬉しさが体感でき、食への興味関心につながっている。	A	A		・時期やその時の子どもの姿に合った保健、健康についての話を毎月日にちを決めて行っていく。写真や絵図を用いて行い、学んだことが実践できるよう投げかけていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	支援体制を整え、家庭や専門機関と連携して、一人一人の発達や特性に合わせた教育・保育を行っている	・専門講師による巡回相談やカンファレンスを通して、一人一人の特性や具体的な対応についての学びを積み重ね保育に活かしている。また全家庭との面談を実施し保護者の考えに触れたり育ちを共有したりするなど連携しながら、一人一人へのねらいや支援の明確化に今後も努めていきたい。	B	B		・保護者同意のもと、関係諸機関へ積極的に連絡を取り、支援に必要な情報の交換や連携を図る ・支援が必要な子への支援方法や育ちにつながるための保護者面談を年4回行い情報交換や育ちを共有をすることでサポートプランの作成に活かす
5 組織運営	(1)組織体制の充実	職員一人一人が自分の役割に責任を持ち、また、互いの良さを認め合いながら連携をとり、情報を共通理解することで、働きやすい環境を整備している	・職員会議だけでなく、毎日の打ち合わせやすくすくミーティング等、意見交換やアイデア、情報共有の場があり、分掌担当者だけでなく職員間で連携を取りながら行事の準備を進めている。「自分ごと」と捉えた行動を更に心がけていきたい。	A	A		・職員が様々な事柄（支援内容、教材準備、環境構成、地域資源の把握、行事の運営等）を自分事と捉え、行動に移す ・気づきはすぐに声に上げる
6 研　修	(1)研修体制の充実	研修テーマに沿った視点で研究保育を行い、子どもの姿を多面的に捉え、保育改善と質の向上に努めている	・研修テーマをふまえた事後研修会を行い、保育者の具体的なかかわりや環境構成について学んだ。他園の職員や外部講師を招き、自園だけでは気づきにくい視点についての意見をもらうことで学びを深めることができ、次の実践に活かすことができた。	B	B		・日々の保育の振り返りや公開保育の事後研修で、子どもを見取る視点の捉え方にずれが生じないように、事前に職員間で確認、周知をしていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	心動かされ「やってみよう」と自ら挑戦したり、「もっとこうしよう」と夢中になって遊びに取り組んでいる	・保育者が共同作業者となって子どもと一緒に夢中になって遊ぶことや、安心して失敗できる環境を意識することで、子どもの「やってみたい」「もっとこうしたい」という心動かされる姿につながった。	A	A		・「もっとやってみよう」と試行錯誤したり挑戦したりできるよう、子どもの興味関心に合わせた再構成をする。また、遊びが継続し展開するための終わり方やとっておき方を日々意識していく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	子どもの姿や成長を共有したり、良さを認め合ったりしながら互いに育ちを支えている	・登降園時の会話や降園時のボード、ドキュメンテーションで、子どもの育ちや遊びの面白さを保護者に発信してきた。また面談や保育参加会でもその個の良さを伝えたり、保護者の悩みを聞いたりしながら、子育てのパートナーとなり共に子どもの育ちを支えることができた。	A	A		・ドキュメンテーションを利用し子どもの育ちを伝えていくことを継続しつつ、10の姿についても触れ、子どもが遊びを通して学んでいることへの理解を図る ・支援が必要な子、その個の保護者を支えるために他機関との連携を強化し情報共有していく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	三校二園の交流を通し、東豊力を意識した教育・保育活動を展開し、幼、小・中学校との交流が継続的に図れる状態になっている	・公開保育に小中学校からの参加者があり、保育内容や子どもの遊びの姿を見てもらうことができた。また、職員が積極的に小中学校の公開授業時に参加し、小中学校の取り組みや児童生徒の様子を知ることができ、互いの教育・保育の理解につながった。コロナ感染症により子ども同士の交流の機会がほぼなかったので、今後継続的な交流ができるよう、連携をとりながらすすめていきたい。	B	A		・現場の職員同士が意見交換できる場を設ける ・地域の事や互いの学校、園の様子を知ることが出できるよう、学校や園のおたより配布を継続していく ・子ども達が学校への興味を高められるよう施設利用を継続すると共に、子ども同士の交流など開かれた交流も計画していく
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の人材や環境を取り入れた行事や活動が行われ、また、小中学校のグランド利用等を通して子どもたちが地域に親しみを持てるようになっている	・地域資源や人材を活かした行事や活動が、地域の方の協力のもと実施することができ、子ども達の心が動く豊かな体験となった。地域にある施設（消防署分署、交番、公園など）への訪問や小学校との開かれた交流も、感染症対策をとりながら行っていきたい。	B	A		・子どもも職員も地域を知り、地域の方とあいさつを交わす等、地域に親しみがもてるよう月に1回以上は園外へ出掛ける ・地域資源や人材を活かした行事や活動を、園全体で遊びに活かし、豊かな自然体験を行う